

2. 大気質（粉じん等）

(1) 調査結果の概要

① 気象の状況

気象の状況は、「10.1.1 大気環境 1. 大気質（窒素酸化物） (1) 調査結果の概要」における「① 気象の状況」のとおりである。

② 降下ばいじんの状況

a. 現地調査

(a) 工事用資材等の搬出入

7. 調査地域

調査地域は工事関係車両の主要な走行ルートの沿道とした。

4. 調査地点

調査地点は図 10.1.1.1-1 のとおり、工事関係車両の主要な走行ルート沿いの 1 地点（沿道）とした。

ウ. 調査期間

調査期間は以下のとおり、4 季 1 か月の連続調査を行った。

夏季調査：令和 2 年 7 月 31 日 ～ 8 月 31 日

秋季調査：令和 2 年 10 月 14 日 ～ 11 月 17 日

冬季調査：令和 3 年 1 月 6 日 ～ 2 月 6 日

春季調査：令和 3 年 4 月 16 日 ～ 5 月 17 日

エ. 調査方法

「環境測定分析法註解 第 1 巻」（環境庁、昭和 59 年）に定められた手法により、粉じん等（降下ばいじん）を測定し、調査結果の整理を行った。

オ. 調査結果

降下ばいじんの現地調査結果は表 10.1.1.2-1 のとおりである。

表 10.1.1.2-1 降下ばいじんの現地調査結果

(単位：t/(km²・月))

調査地点	夏季	秋季	冬季	春季	全期間
沿道 (一般国道 328 号)	1.1	1.7	2.1	2.8	2.0

注：全期間の値は、各季の調査結果の平均値である。

(b) 建設機械の稼働

7. 調査地域

調査地域は対象事業実施区域及びその周囲とした。

4. 調査地点

調査地点は図 10.1.1.1-1 のとおり、対象事業実施区域の周囲の 1 地点（一般 2）とした。

ウ. 調査期間

調査期間は以下のとおり、各季1か月の連続調査を行った。

夏季調査：令和2年 7月 31日 ～ 8月 31日

秋季調査：令和2年 10月 14日 ～ 11月 17日

冬季調査：令和3年 1月 6日 ～ 2月 6日

春季調査：令和3年 4月 16日 ～ 5月 17日

エ. 調査方法

「環境測定分析法註解 第1巻」(環境庁、昭和59年)に定められた手法により、粉じん等(降下ばいじん)を測定し、調査結果の整理を行った。

オ. 調査結果

降下ばいじんの現地調査結果は表10.1.1.2-2のとおりである。

表 10.1.1.2-2 降下ばいじんの現地調査結果

(単位：t/(km²・月))

調査地点	夏 季	秋 季	冬 季	春 季	全期間
一般2	1.9	4.9	4.5	4.9	4.1

注：全期間の値は、各季の調査結果の平均値である。

③ 交通量の状況

「10.1.1 大気環境 1.大気質(窒素酸化物) (1)調査結果の概要 ④交通量の状況」に記載のとおりである。

(2) 予測及び評価の結果

① 工事の実施

a. 工事に用資材等の搬出入

(a) 環境保全措置

工事に用資材等の搬出入に伴う粉じん等の影響を低減するため、以下の環境保全措置を講じる。

- ・ 工事関係者の通勤においては、乗り合いの促進により工事関係車両台数の低減を図る。
- ・ 工事工程等の調整により、可能な限り工事関係車両台数を平準化し、建設工事のピーク時の台数の低減に努める。
- ・ 工事関係車両は適正な積載量及び走行速度により運行するものとし、必要に応じてシート被覆等の飛散防止対策を講じる。
- ・ 工事関係車両の出場時にタイヤ洗浄を行う。必要に応じて搬入路での散水を実施する。
- ・ タイヤ等に付着した土砂が周囲に飛散することのないよう、工事関係車両が出場する際には、タイヤ洗浄を実施する。
- ・ 定期的に会議等を行い、環境保全措置の内容について工事関係者に周知徹底する。

(b) 予 測

7. 予測地域

工事関係車両の主要な走行ルートに沿道とした。

4. 予測地点

現地調査を実施した工事関係車両の主要な走行ルート沿いの1地点（沿道）とした。

ウ. 予測対象時期等

工事計画に基づき、工事関係車両の走行による土砂粉じんの発生量が最大となる時期（季節別）とした。

エ. 予測手法

「道路環境影響評価の技術手法（平成 24 年度版）」（国土交通省国土技術政策総合研究所・独立行政法人土木研究所、平成 25 年）に基づき、降下ばいじん量を定量的に予測した。

工事前資材等の搬出入に伴う粉じん等の予測手順は図 10. 1. 1. 2-1 のとおりである。

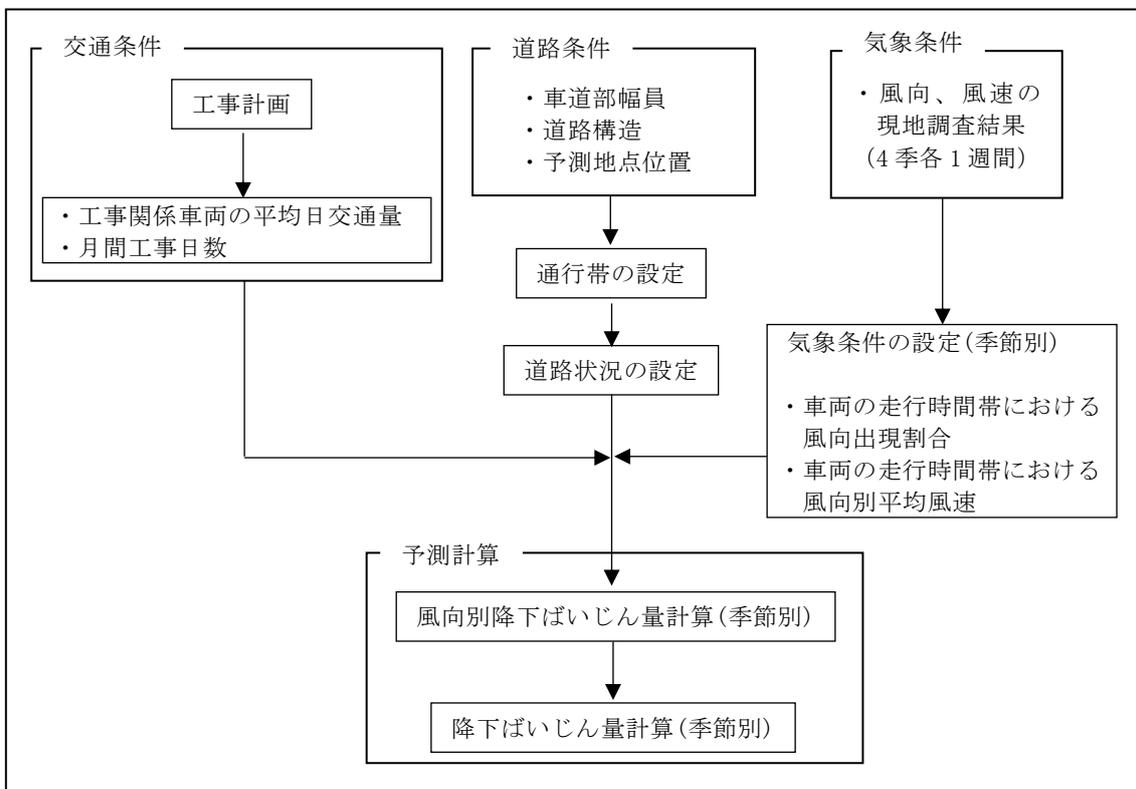


図 10. 1. 1. 2-1 工事前資材等の搬出入に伴う粉じん等の予測手順

(7) 計算式

i. 風向別降下ばいじん量の算出式（図 10. 1. 1. 2-2 参照）

$$R_{ds} = N_{HC} \cdot N_d \int_{-\pi/16}^{\pi/16} \int_{x_1}^{x_2} a \cdot (u_s/u_0)^{-b} \cdot (x/x_0)^{-c} x dx d\theta$$

[記号]

R_{ds} : 風向別降下ばいじん量 (t/(km²・月))
(添え字 s は風向 (16 方位) を示す。)

N_{HC} : 工事関係車両の日平均交通量 (台/日)

N_d : 季節別の平均月間工事日数 (日/月)

- a : 基準降下ばいじん量 ($t/(km^2 \cdot m^2 \cdot 台)$)
 (基準風速時の基準距離における工事関係車両 1 台当たりの発生源 $1m^2$ からの降下ばいじん量)
- u_s : 季節別風向別平均風速 (m/s) ($u_s < 1m/s$ の場合は、 $u_s = 1m/s$ とする。)
- u_0 : 基準風速 ($u_0 = 1m/s$)
- b : 風速の影響を表す係数 ($b = 1$)
- x : 風向に沿った風下距離 (m)
- x_0 : 基準距離 ($x_0 = 1m$)
- c : 降下ばいじんの拡散を表す係数
- x_1 : 予測地点から工事関係車両通行帯の手前側の端部までの距離 (m)
 ($x_1 < 1m$ の場合は、 $x_1 = 1m$ とする)
- x_2 : 予測地点から工事関係車両通行帯の奥側の端部までの距離 (m)

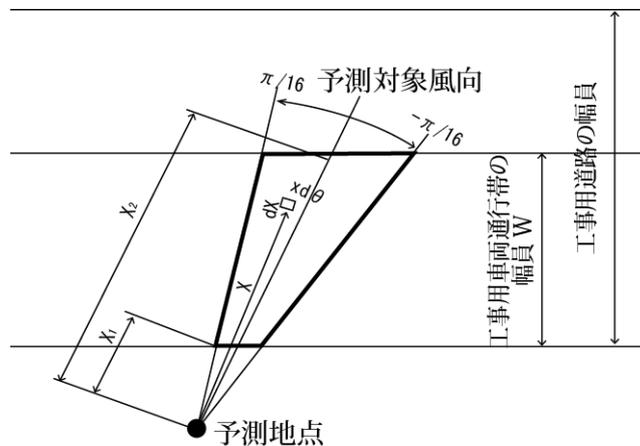


図 10. 1. 1. 2-2 風向別の発生源の範囲と予測地点の距離の考え方

ii. 降下ばいじん量の算出式

$$C_d = \sum_{s=1}^n R_{ds} \cdot f_{ws}$$

[記号]

- C_d : 降下ばいじん量 ($t/(km^2 \cdot 月)$)
- n : 方位数 (=16)
- R_{ds} : 風向別降下ばいじん量 ($t/(km^2 \cdot 月)$)
 なお、 s は風向 (16方位) を示す。
- f_{ws} : 風向出現割合
 なお、 s は風向 (16方位) を示す。

(イ) 予測条件

i. 交通量及び降下ばいじんの諸元

(i) 交通量

表 10. 1. 1. 2-3 のとおり、季節毎に大型車両の台数が最大となる日平均交通量を設定した。

表 10.1.1.2-3 予測地点における工事関係車両の日平均交通量

予測地点	日平均交通量 (台/日)			
	夏季	秋季	冬季	春季
沿道	107	83	74	74

(ii) 基準降下ばいじん量 a 及び降下ばいじんの拡散を表す係数 c

予測に用いる基準降下ばいじん量 a 及び降下ばいじんの拡散を表す係数 c は、表 10.1.1.2-4 に基づき設定した。ここでは、現場内運搬（舗装路+タイヤ洗浄装置）で予測を行った。

表 10.1.1.2-4 基準降下ばいじん量 a 及び降下ばいじんの拡散を表す係数 c

工事に使用する道路の状況	a	c
現場内運搬（舗装路+タイヤ洗浄装置）	0.0007	2.0

〔道路環境影響評価の技術手法（平成 24 年度版）〕
 （国土交通省国土技術政策総合研究所・独立行政法人土木研究所、平成 25 年）より作成

ii. 気象条件

予測に用いる気象条件として、予測地点（沿道）における気象観測結果を基に、工事関係車両の平均的な走行時間帯における季節別風向別出現頻度及び季節別風向別平均風速を表 10.1.1.2-5 のとおり整理した。

表 10.1.1.2-5 予測に用いた気象条件

(単位：出現頻度；%、平均風速；m/s)

季節	風向別出現頻度及び平均風速																	
	方位	NNE	NE	ENE	E	ESE	SE	SSE	S	SSW	SW	WSW	W	WNW	NW	NNW	N	静穏
夏季	出現頻度	1.4	1.4	—	1.4	14.3	14.3	18.6	7.1	31.4	10.0	—	—	—	—	—	—	—
	平均風速	0.3	0.6	—	1.4	3.6	1.5	1.9	3.0	2.5	2.3	—	—	—	—	—	—	—
秋季	出現頻度	7.1	1.4	2.9	2.9	1.4	4.3	7.1	11.4	8.6	7.1	5.7	7.1	8.6	8.6	2.9	10.0	2.9
	平均風速	0.6	0.6	0.9	0.6	1.3	1.1	1.1	1.4	1.6	1.3	2.6	2.6	1.3	1.1	0.7	0.6	—
冬季	出現頻度	27.1	7.1	4.3	4.3	4.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.4	4.3	1.4	8.6	8.6	25.7	2.9
	平均風速	1.1	1.0	0.8	0.6	1.9	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.3	1.5	3.4	2.8	2.0	1.4	—
春季	出現頻度	7.1	27.1	12.9	5.7	1.4	1.4	—	2.9	2.9	2.9	11.4	7.1	8.6	1.4	2.9	2.9	1.4
	平均風速	0.9	2.7	2.8	2.5	1.2	0.3	—	1.2	2.6	2.0	2.0	1.4	2.1	2.1	1.5	1.0	—

注：1. 工事関係車両の平均的な走行時間（9～12時、13～17時）を対象に集計した。

2. 表中の「—」は出現しなかったことを示す。

オ. 予測結果

予測結果は表 10.1.1.2-6 のとおりであり、予測地点での寄与濃度の最大は、夏季及び秋季の 0.5t/(km²・月)と予測する。

表 10.1.1.2-6 工事関係車両の走行に伴う降下ばいじん予測結果

予測地点	寄与濃度 (t/(km ² ・月))			
	夏季	秋季	冬季	春季
沿道 (一般国道328号)	0.5	0.5	0.4	0.2

(c) 評価の結果

7. 環境影響の回避、低減に係る評価

工事用資材等の搬出入に伴う粉じん等の影響を低減するための環境保全措置は、以下のとおりである。

- ・ 工事関係者の通勤においては、乗り合いの促進により工事関係車両台数の低減を図る。
- ・ 工事工程等の調整により、可能な限り工事関係車両台数を平準化し、建設工事のピーク時の台数の低減に努める。
- ・ 工事関係車両は適正な積載量及び走行速度により運行するものとし、必要に応じてシート被覆等の飛散防止対策を講じる。
- ・ タイヤ等に付着した土砂が周囲に飛散することのないよう、工事関係車両が出場する際には、タイヤ洗浄を実施する。
- ・ 定期的に会議等を行い、環境保全措置の内容について工事関係者に周知徹底する。

工事用資材等の搬出入に伴う降下ばいじん量の予測結果は、最大 0.5t/(km²・月)であり、上記の環境保全措置を講じることにより、工事用資材等の搬出入に伴う粉じん等に関する影響は、実行可能な範囲内で低減が図られているものと評価する。

4. 国又は地方公共団体による基準又は目標との整合性の検討

粉じん等については、環境基準等の基準又は規制値は定められていないが、環境保全目標として設定した降下ばいじん量の参考値[※]である 10t/(km²・月)に対し、予測値はこれを下回っている。

以上のことから、環境保全の基準等との整合が図られているものと評価する。

※「道路環境影響評価の技術手法（平成 24 年度版）」（国土交通省国土技術政策総合研究所・独立行政法人土木研究所、平成 25 年）に記載される降下ばいじん量の参考値とした。

b. 建設機械の稼働

(a) 環境保全措置

建設機械の稼働に伴う粉じん等の影響を低減するため、以下の環境保全措置を講じる。

- ・切土、盛土及び掘削等の工事に当たっては、適宜整地、転圧等を行い、土砂粉じん等の飛散を抑制する。
- ・建設機械は工事規模にあわせて適正に配置し、効率的に使用する。
- ・定期的に会議等を行い、環境保全措置の内容について工事関係者に周知徹底する。

(b) 予 測

7. 予測地域

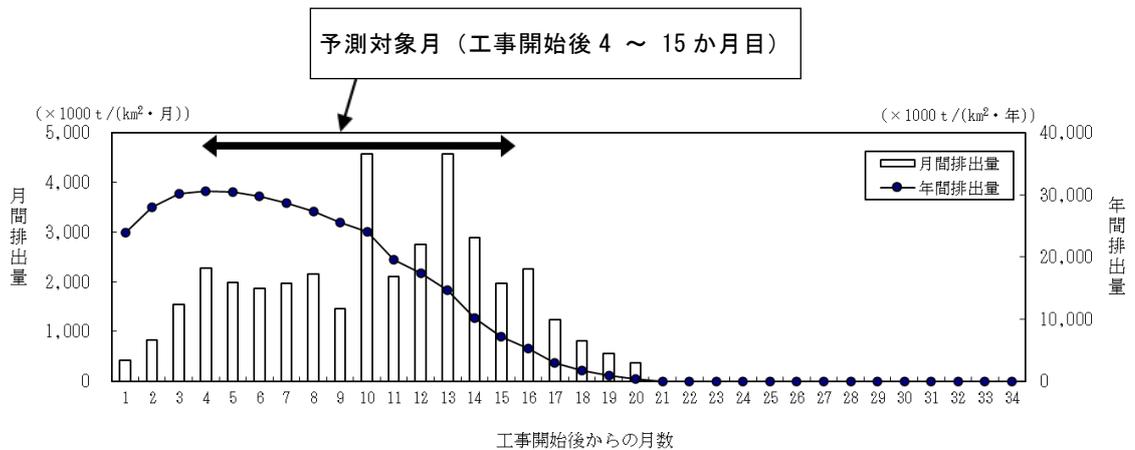
対象事業実施区域及びその周囲とした。

イ. 予測地点

対象事業実施区域の周囲の9地点とした（「10.1.1.1 大気質（窒素酸化物）」の予測地点（図 10.1.1.1-9）と同様）。

ウ. 予測対象時期等

工事計画に基づき、建設機械の稼働による土砂粉じんの発生量が最大となる時期（工事開始後4～15か月目）とした（図 10.1.1.2-3 参照）。



注：年間排出量は、各月を起点とした12か月間の月間排出量の合計値を示す。

図 10.1.1.2-3 建設機械の稼働による月別発生量（降下ばいじん量）

I. 予測手法

「道路環境影響評価の技術手法（平成 24 年度版）」（国土交通省国土技術政策総合研究所・独立行政法人土木研究所、平成 25 年）に基づいて行った。

建設機械の稼働に伴う粉じん等の予測手順は、図 10.1.1.2-4 のとおりである。

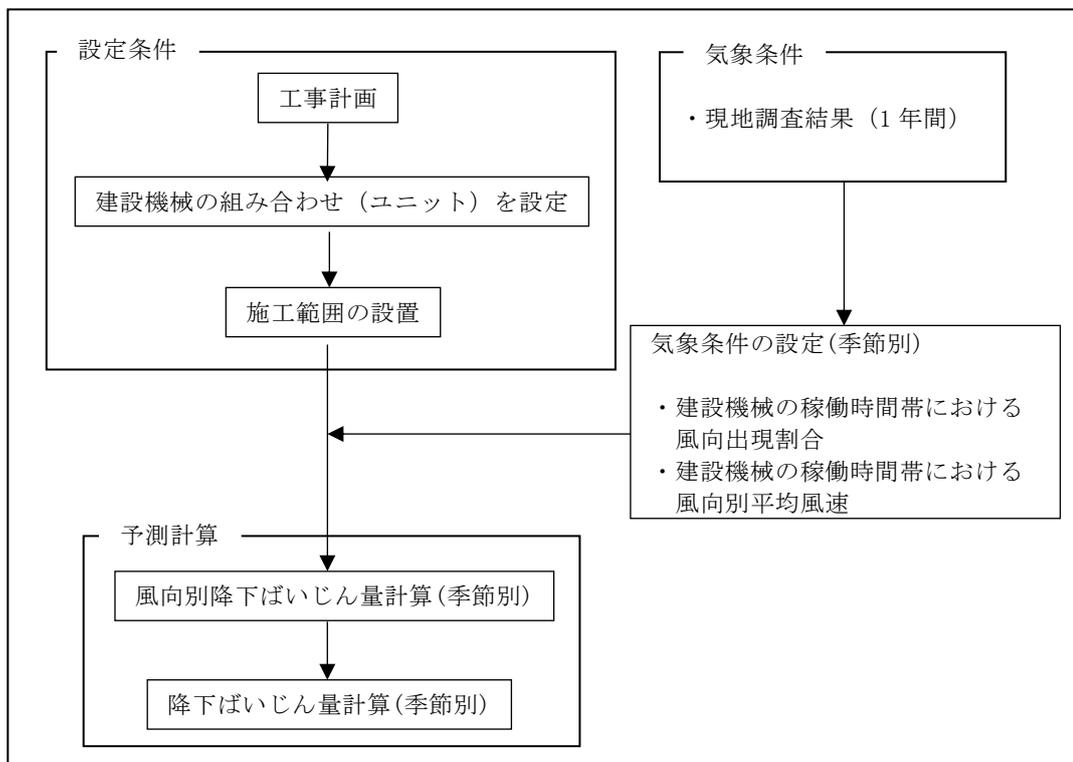


図 10.1.1.2-4 建設機械の稼働に伴う粉じん等の予測手順

(7) 計算式

i. 風向別降下ばいじん量の算出式

$$R_{ks} = (N_U/m) \cdot N_d \cdot a \cdot (u_s/u_0)^{-b} \cdot (x/x_0)^{-c}$$

[記号]

- R_{ks} : 風向別メッシュ別降下ばいじん量 (t/(km²・月))
(添え字 k は発生源メッシュ、 s は風向 (16 方位) を示す。)
- N_U : ユニット数
- m : メッシュ数
- N_d : 月間工事日数 (日/月)
- a : 基準降下ばいじん量 (t/(km²・m²・ユニット))
(基準風速時の基準距離における 1 ユニットからの 1 日当たりの降下ばいじん量)
- u_s : 季節別風向別平均風速 (m/s)
($u_s < 1\text{m/s}$ の場合は、 $u_s = 1\text{m/s}$ とする。)
- u_0 : 基準風速 ($u_0 = 1\text{m/s}$)
- b : 風速の影響を表す係数 ($b = 1$)
- x : 風向に沿った風下距離 (m)
- x_0 : 基準距離 ($x_0 = 1\text{m}$)
- c : 降下ばいじんの拡散を表す係数

ii. 降下ばいじん量の算出式

$$C_d = \sum_{k=1}^m \sum_{s=1}^n R_{ks} \cdot f_{ws}$$

[記号]

C_d : 降下ばいじん量 (t/(km²・月))

m : メッシュ数

n : 方位数

R_{ks} : 風向別メッシュ別降下ばいじん量 (t/(km²・月))
(添え字 k は発生源メッシュ、 s は風向 (16 方位) を示す。)

f_{ws} : 風向出現割合

(イ) 予測条件

i. 予測対象ユニットの選定と配置

予測対象ユニットについては、工事計画より予測対象時期の工種及び工事内容を想定し、最も粉じんの影響が大きくなるものを設定した。

主たる工事として、造成・基礎工事がある。各ユニットは風力発電機設置位置及び土捨場に配置し、ユニット数は工事計画より表 10.1.1.2-7 のとおり設定した。

表 10.1.1.2-7 工種別・季節別ユニット稼働位置

工種		夏季	秋季	冬季	春季
		6～8月	9～11月	12～2月	3～5月
造成・ 基礎工事	掘削工 (土砂掘削)	1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8 土捨場	1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8 土捨場	1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8 土捨場	1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8 土捨場

注：表中の数字は、風力発電機の番号を示す（図 2.2-1 参照）。

ii. 基準降下ばいじん量 a 及び降下ばいじんの拡散を表す係数 c

予測に用いる基準降下ばいじん量 a 及び降下ばいじんの拡散を表す係数 c は、表 10.1.1.2-8 に基づき設定した。

表 10.1.1.2-8 基準降下ばいじん量 a 及び降下ばいじんの拡散を表す係数 c

種別	ユニット	a	c
造成・基礎工事	掘削工（土砂掘削）	17,000	2.0

〔「道路環境影響評価の技術手法（平成 24 年度版）」（国土交通省国土技術政策総合研究所・独立行政法人土木研究所、平成 25 年）より作成〕

iii. 気象条件

予測に用いる気象条件は、調査地点（一般 1）における気象観測結果を基に、建設機械の稼働時間帯における季節別風向別出現頻度及び季節別風向別平均風速を、表 10.1.1.2-9 のとおり整理した。

表 10.1.1.2-9 予測に用いた気象条件（一般 1）

（単位：出現頻度；％、平均風速；m/s）

季節	風向別出現頻度及び平均風速																
	方位	NNE	NE	ENE	E	ESE	SE	SSE	S	SSW	SW	WSW	W	WNW	NW	NNW	N
秋季	出現頻度	5.9	3.4	7.0	9.5	22.2	3.4	1.2	1.1	2.3	4.0	7.7	3.0	2.2	7.2	8.0	11.0
	平均風速	2.7	2.1	4.0	3.8	4.2	3.3	1.9	1.9	2.0	3.6	4.9	2.6	2.6	2.7	3.6	3.4
冬季	出現頻度	9.9	4.3	5.1	6.1	13.9	2.2	0.8	0.7	1.4	1.3	4.3	2.6	5.8	10.0	15.3	15.8
	平均風速	3.2	2.5	2.3	4.4	4.9	4.7	1.6	1.4	3.0	3.1	5.6	3.8	3.9	3.7	5.3	4.0
春季	出現頻度	3.4	1.5	4.2	7.4	24.3	7.0	2.0	1.5	2.2	6.9	8.7	6.7	10.4	6.5	2.8	3.9
	平均風速	3.0	2.0	2.0	4.2	4.7	3.4	2.5	1.8	2.5	4.8	5.1	4.1	3.5	3.5	3.2	4.1
夏季	出現頻度	1.5	1.5	4.8	13.2	20.1	6.3	3.0	4.9	4.9	7.1	15.6	5.3	4.1	3.8	2.3	1.6
	平均風速	5.2	6.5	4.0	4.8	5.2	3.8	4.3	4.1	3.4	4.0	5.0	4.0	4.5	3.3	2.4	2.7

注：建設機械の平均的な稼働時間帯（9～12時、13～17時）を対象に集計した。

オ. 予測結果

予測結果は表 10.1.1.2-10 のとおりであり、予測地点での寄与濃度の最大は、環境 6（冬季）における 0.05t/(km²・月)である。

表 10.1.1.2-10 建設機械の稼働による降下ばいじん予測結果

予測地点	寄与濃度 (t/(km ² ・月))			
	夏季	秋季	冬季	春季
環境 1	0.02	0.02	0.01	0.02
環境 2	0.01	0.01	0.00	0.01
環境 3	0.01	0.01	0.01	0.01
環境 4	0.01	0.02	0.02	0.01
環境 5	0.02	0.03	0.04	0.02
環境 6	0.02	0.04	0.05	0.03
環境 8	0.00	0.00	0.00	0.00
環境 9	0.00	0.00	0.01	0.00
環境 10	0.01	0.01	0.01	0.01

(c) 評価の結果

7. 環境影響の回避、低減に係る評価

建設機械の稼働に伴う粉じん等の影響を低減するための環境保全措置は、以下のとおりである。

- ・切土、盛土及び掘削等の工事に当たっては、適宜整地、転圧等を行い、土砂粉じん等の飛散を抑制する。
- ・建設機械は工事規模にあわせて適正に配置し、効率的に使用する。
- ・定期的に会議等を行い、環境保全措置の内容について工事関係者に周知徹底する。

建設機械の稼働に伴う粉じん等は、周囲の居住地域において $0.00\sim 0.05\text{t}/(\text{km}^2 \cdot \text{月})$ と小さく、上記の環境保全措置を講じることにより、建設機械の稼働に伴う粉じん等に関する影響は、実行可能な範囲内で低減が図られているものと評価する。

4. 国又は地方公共団体による基準又は目標との整合性の検討

粉じん等については、環境基準等の基準又は規制値は定められていないが、環境保全目標として設定した降下ばいじん量の参考値[※]である $10\text{t}/(\text{km}^2 \cdot \text{月})$ に対し、予測値はこれを十分に下回っている。

以上のことから、環境保全の基準等との整合が図られているものと評価する。

※「道路環境影響評価の技術手法（平成24年度版）」（国土交通省国土技術政策総合研究所・独立行政法人土木研究所、平成25年）に記載される降下ばいじん量の参考値とした。